

「イヌイス 第一話 森からの使者」 作：ケロツズ



①森に住んでるおじいちゃんから、健司君に誕生日プレゼントが届きました。
健司「わーい。木馬だ。」
ママ「小さいから馬ではなく、犬ね。」
パパ「懐かしいな。パパも子どもの頃に、じいちゃんが作ってくれたよ。」
健司「えっ、おじいちゃんが作ったんだ、すごい。」



②夜、健司君が寝ていると、「ワン。ワン」犬の吠える声が出て、目を覚ましました。
イヌイス「よし、起きたね健司。」イヌイスが喋ったので、健司君はびっくりしました。
健司「ギョエー。きつ、君、喋れるのっ。」イヌイス「当たり前さ。森の魔法使いが作ってくれたんだもの」健司「僕のおじいちゃんって、魔法使いなの？」イヌイス「森の間はみんなそう呼んでるよ。おいら達、木の切れ端に命をくれるんだぜ。」
健司君は驚きっぱなしです。



③イヌイス「よし、健司、おいらの背中にお乗りよ。遊びに行こう。」
健司君は何が何だかわからないまま、イヌイスの背中に跨りました。
イヌイス「さあ、出発だ。しっかりつかまってろよ。」
健司「ちょっと待って。まさか窓から出る気かい。ここはマンションの四階だよ。」
イヌイスは健司君の話を聞かず、窓枠を、ピョンと飛び越えました。



④イヌイス「ごめんごめん、びっくりしたかい。おいらは空が飛べるんだ。しかも、ジェット機よりも早く飛べるんだぜ。」健司「すごい。こんなの初めてだ。」イヌイス「どこに行きたい？君の好きな所に連れて行ってあげるよ。」健司「おじいちゃんちに行きたい。」
イヌイス「えっ、そんな近くでいいのかい。アメリカまでだって、あっという間に着くというのに。」



⑤イヌイス「さあ、着いたよ。でも、おじいちゃんは寝てるよ。おこすのかい。」
健司「おこさないよ。」イヌイス「じゃあ、何しに来たんだい。」
健司「ありがとうの気持ちを伝えるためさ。」
イヌイス「それなら、おいらが君の家に着いた日に、電話でありがとうって言ったじゃん。」
健司「電話だけでは伝えきれないよ。」
イヌイス「じゃあ、どうするんだい。」



⑥健司君は木の枝を拾い、地面の土に文字を書き始めました。イヌイス「人間って、変わった事するんだな。でも、おいらも、そういうの好きだぜ。きっと、じいさんも喜ぶよ。」健司「前におじいちゃんが言ってたんだ。人の手で書かれた文字は、人の心に届くって。どういう意味か僕には分からないけど、おじいちゃんは手で書いた文字が好きなんだよ。」
イヌイス「ふーん。さすが森の魔法使いらしいね。」「コケッコー」と一番鳥がどこかで泣きました。健司「えっ、もう朝、今着いたばかりだよ。」イヌイス「夜の魔法の世界は、昼間の世界より、ずっと早く進むんだ。さあ、早く僕の背中に乗って。太陽が昇ったら、おいらは飛べなくなるんだ。」



⑦ありがとうって書き終えた健司君が、背中に飛び乗ると、イヌイスは舞い上がりました。健司「見て見て、案山子が手を振ってるよ。」イヌイス「案山子もじいちゃんが作ったものだから、夜になったら動いてるよ。」健司「じゃあ、あのベンチも動くの？」イヌイス「ベンチが動くわけないだろ。でもね、生きてるんだ。座ってみれば健司にも分かるよ。優しく包んでくれるから。森の間はみんな、同じ地球で暮らす総てのものに優しいんだ。」イヌイスがまじめな話をするもので、健司君は急にねむくなり、イヌイスの背中で寝てしまいました。



⑧朝になり健司君はベッドの上で目を覚ましました。健司「ねえっ、イヌイス。」呼んでも返事はなく、イヌイスはじっと窓の方を向いたまです。健司「なんだ。やっぱり夢だったんだ。」とてもがっかりしている健司君です。

—————抜きながら—————

トゥルルルルル、トゥルルルルル
部屋の外で電話が鳴りました。



⑨ママ「もしもし。あら、おとう様。えっ、健司。今起きて来ましたわ、ちょっと待って下さいね。」ママ「健司、おじい様からよ。」



⑩健司「もしもし」じいじ「やあ、健司。お前さん、もう字が書けるんだなあ。」(しみじみと、)健司「えっ、何言ってるの。」じいじ「きのう、来てくれたんだろ。今度来たら、じいちゃんを起こしてくれよ。じいちゃんが森の天狗さまの所に、ご挨拶に連れて行ってやるで。」健司「え〜っ。夢じゃなかったんだ。」健司君はとてもおどろき、とても喜びました。



⑪晩ご飯の時に健司君は昨夜の話をパパに話しました。昼間、ママにも話したのですが、ママは信じてくれませんでした。パパは健司君の話聞き終えると、パパ「パパも子供の頃は毎晩夜空を飛び冒険していたよ。でも、ある日、急に飛べなくなつたんだ。大人になったら飛んでたことも忘れてた。今、健司の話聞いて、すこしだけ思い出したよ。ホウキに乗った魔女の子と、競争してパパが勝つたんだぞ。」健司「パパすごーい。他にはどんな事してたの？」パパ「うーん。思い出せないな。」



⑫その頃、森に住んでるおじいさんは、健司君と一緒に久しぶりに夜空を飛ぼうと、自家用に大人も乗れる、少し大きめのイヌイスを作っていました。森にはまだまだ不思議な事がいっぱいです。天狗様や妖怪。魔女や妖精も森の住人です。健司君とおじいさんの森の冒険は、これから始まります。ここの話、みんなにこっそり教えちゃうけど、パパが子供の頃競争したホウキの魔女の子は、実は、健司君のママだったので。続きは次回の講釈で。おしまい